

令和7年度 金沢市教育委員会指定「新金沢型学校教育モデル実践推進事業」

金沢探究スタイル実践推進校 教科一般

令和7年度 研究紀要

研究主題

自ら考え、学びを深化させる指導方法の工夫

～子どもの疑問を大切にし、問い続ける力の育成をめざして～



金沢市立野田中学校

目 次

ごあいさつ

I	研究の概要	(ページ)
1.	研究主題	1
2.	主題設定の理由	1
3.	研究仮説	1
4.	研究方針	2
5.	研究内容	2
6.	検証の方法	4
7.	研究の組織	4
8.	年間計画	5
9.	研究経過	6
10.	取組の検証	8
	・公開研究発表会 授業デザイン (1年英語・国語 2年国語・数学 3年理科)	10
II	各教科の実践	
	国語科	25
	社会科	27
	数学科	28
	理 科	29
	音楽科	31
	美術科	32
	保健体育科	33
	技術・家庭科	34
	英語科	36
III	アンケートの結果	39
IV	学びの深化のための ICT 活用について	41
	おわりに	
	研究同人	

ご あ い さ つ

金沢市教育委員会「新金沢型学校教育モデル実践推進事業」（金沢探究スタイル実践推進校・教科一般）の指定を受け、研究主題を「自ら考え、学びを深化させる指導方法の工夫」、副題として～子どもの疑問を大切にし、問い続ける力の育成を目指して～を掲げ、研究を進めております。令和6年度からの研究も含め、2年目が終わろうとしています。

これまで本校が培ってきましたペア・グループ等で考えを深める対話活動、生徒自らが学習した内容を確認し、考えの変容を自覚するための振り返り活動をより充実させるために、生徒自身が学習課題を自分事として捉えることをまず大切にしようとして研究を進めて参りました。「なぜ？」「どうしてだろう？」「もっと知りたい！」など生徒の疑問や思いである「自分の問い」を持って授業に臨むことができるよう、『不思議のタネ』を授業の導入部分に提示すること、各教科の見方・考え方を生かし、授業のねらいや本質に迫るための立場等を与える『不思議のスポットライト』を必要に応じて提示すること、また授業の終末では『今日の学び』として生徒の学びに対する意識の変化やさらに学びたいことなどについて自由に記述できるようにすること、という3点に重点を置き、研究を進めております。『不思議のタネ』の提示については、全教科・全学年で実施し、生徒に学習課題への自我関与を促すことを全教員で共通して取り組んでおります。これにより生徒が自ら疑問を持ち、解決すべき本質的な問いとは何かを考え、協働して問いを解決する場面を通して「主体的・対話的で深い学び」の実現を図ることを目指しております。

11月14日（金）の公開研究発表会では、1年国語・英語、2年国語・数学、3年理科において、それぞれの教科部会で検討した『不思議のタネ』から、授業のねらいに迫る生徒の姿を見ていただきました。授業研究会では、生徒自身の言葉で授業を終えて学んだことや感じていることを発表でき、生徒の活躍の場とすることもできました。一方で、授業のねらいや本質的な問いにせまる『不思議のタネ』をさらに吟味すること、授業で取り上げることのできなかった「問い」を生徒自身が解決するための手立てや環境を整えること、教科の特性や単元のねらいによっては『不思議のタネ』を創ること自体に難しさがある場合の手立てを考えることなど、課題もまだまだあります。

今後も、研究主任のリーダーシップのもと、学習・研究部を中心にこれらの解決を図っていきたいと考えています。「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、生徒自身がワクワクして授業に臨むことが大切であることを忘れず、授業改善を続けていきたいと考えています。授業を通して、生徒の問い続ける力・考え続ける力・考え抜く力を育むことで、答えなき「問い」に向き合わなければならない現代社会において、生徒が逞しく生き抜いていってくれることを願っています。

最後になりましたが、昨年度よりご指導・ご助言をいただいております、立正大学・鹿嶋真弓教授をはじめ、金沢市教育委員会、関係各位に厚く御礼申し上げます。

令和8年3月吉日

金沢市立野田中学校 校長 杉中 純子

I 研究の概要

1. 研究主題

学校研究主題 自ら考え、学びを深化させる指導方法の工夫
～子どもの疑問を大切にし、問い続ける力の育成を目指して～

2. 主題設定の理由

本校の学校研究が目指すところは、主体的・対話的で深い学びの実現である。そのためには生徒が興味・関心を持って学びに向かうこと、見通しを持って学習に取り組み、各教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせ、他者と協働し様々な考えに触れ考える力を高め、学びを深めること、また、自己の学習活動を振り返り、次の学習につなげることが求められる。

本校では令和2年度より、主体的・対話的で深い学びの実現に向け研究を進めてきた。令和6年度は「不思議のタネ」から生徒自身が「問い」を創る授業実践を行い、その結果、「わからないことを進んで訊くことができた」という回答が全学年で上昇した。特に3年生において顕著な伸びが見られ、不思議のタネをきっかけに自分で課題を見つけ、主体的に取り組む姿勢が育ってきている。

一方で、「問いを創る授業」の実践においては、生徒から多様な疑問が出され、それらが広がりすぎてしまい、単元のねらいから離れてしまう場面も見られた。また、教師側に「生徒が狙った問いを出してくれるか」「こちらから出した方がスムーズに進められて効率的ではないか」という懸念があり、取組の頻度に課題が見られた。

これらの成果と課題を踏まえ、令和7年度は「不思議のタネ」から生まれる問いの質的向上と効果的な焦点化に重点を置く。具体的には、各教科の特質に応じた「見方・考え方」や特定の視点に基づく「不思議のスポットライト」を設定し、単元のねらいに沿った問いの創出を目指す。この「不思議のスポットライト」により、生徒の多様な気づきや疑問を活かしながら、より深い学びにつながる探究的な問いへと発展させる。

授業で生徒が創り出した問いには、授業内で十分に扱いきれない広がりや深さを持つものが多く存在する。これらの問いを大切に育み、生徒自身が「問い→探究→新たな問い」という知的好奇心の循環を自律的に生み出せる学びを目指す。各教科の授業で生徒が創った問いを基盤とした探究活動の時間を計画的に設定することで、質の高い「不思議のタネ」や「不思議のスポットライト」の活用を通して生徒の主体的な学びを促し、「自分の問い」をもって粘り強く課題解決に取り組む力を育成する。

以上、令和7年度の研究では、主体的・対話的で深い学びの実現を目指し、生徒が興味・関心を持って学びに向かい、他者と協働して様々な考えに触れ、自己の学習活動を振り返る力を育成していく。変化の激しい予測困難な時代において、生徒自身が問いを創り、探究し、学びを深めていくプロセスを通して、未来社会を切り拓くための必要な資質・能力の育成を目指していく。

3. 研究仮説

生徒が「自分の問い」という意識をもつためには、「学習の見通しを立てる」「課題に対する自分の考えを持つ」段階で、積極的に関与させることが大切である。そのために、教師は生徒に自我関与を促すための仕掛けを行う必要がある。この仕掛けによって生徒の学

習活動に対する積極的な態度を引き出したいと考えた。本校ではこの仕掛けを「不思議のタネ」とし、教師は授業のねらいにつながる「問い」を生徒に抱かせるための「不思議のタネ」を設定し、提示する。「不思議のタネ」とは文やフレーズ、図や映像といったそれ自体は問いの形になっていないものである。本校では、この「不思議のタネ」からの授業づくりを行うことにより、以下２点の仮説を立てた。

仮説 1

生徒たちは提示された「不思議のタネ」に自ら「問い」を抱き、協働して「問い」を創る。この過程を通して、生徒はこれから行う学習活動に意欲や理解を高め、積極的に取り組むことができるのではないかと。

仮説 2

「問い」創りの経験を積むことで、「自分で課題をみつけることができ、解決できる」生徒を、また問題解決の際には解決方法を考え、将来にわたって「自分の問い」をもち他者と協働しながら解決できる生徒を育てることができるのではないかと。

4. 研究方針

従来本校で行ってきた「対話」活動と「振り返り」指導の実践の成果をいかし、「不思議のタネ」の提示を通して生徒に課題への自我関与を促すことを全教員で共通して取り組む。そして、生徒の自ら疑問をもち、考える力を高め、学びを深め、「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る。その際、生徒の実態や発達段階に配慮しながら取り組みを充実させる。

教科部会の活性化をはかり、学年会とも連携して共通理解、共通実践を行う。また、研究を進め、深めるために、年間４回外部講師を招聘して指導・助言を仰ぐ。

5. 研究内容

(1) 重点的な取組

- ・生徒の問いを引き出す「不思議のタネ」の工夫

授業のねらいにつながる「不思議のタネ」として、どのようなものが適切であり、効果があるのかを実践を通し、精査・検証する。実践した「不思議のタネ」の情報交換等を行い、授業のねらいにせまる教科の本質を踏まえた「問い」を生徒から引き出す工夫をする。

- ・教科の見方・考え方を育む焦点化の工夫

広がりが大きかったり、着目するポイントが不明確になったりする問いに対しては「不思議のスポットライト」を設定し、生徒の思考を効果的に導く工夫を行う。このスポットライトは、膨大な情報や多様な視点の中から、教科の本質に迫る重要な部分に着目を促し、生徒が各教科の特有の見方・考え方に基づいて考察できるように支援するものである。

- ・従来の対話指導と「今日の学び（振り返り）」指導の継続

対話指導については、従来から続けている共通の話型である「学ぶときの訊き方」を利用する。「学ぶときの訊き方」を教室掲示し、共通実践することで、学習活動の円滑化・効率化を図る。

振り返り指導については、授業の終末で学習内容や自らの変容、新たな疑問等を文章化する。どんな内容を「今日の学び（振り返り）」として書くのかを教室掲示し、全教員で共通実践を続ける。

(2) 学力向上・授業力向上の取組

〔学力向上〕

- ・学力の現状の把握と方策

学力調査等の結果を分析し、教科および学年で効果的な対応策を立てる。小中一貫教育の観点から、学力調査等の結果分析について情報交換し、小中相互の学習指導に活用する。

- ・学習習慣の確立

学年の発達段階に応じて家庭学習習慣の定着を図り、各学年の学習担当から提案され、学年で検討した取組について共通理解のもとに取り組む。

- ・個別の支援

学習に関する個別相談・個別指導の機会を設け、意欲・学力の向上をはかる。定期テスト前の質問教室を全学年共通の日程で行う。

- ・野田中校区 学びのスタイル「わからないことを大切にする」

教室前面の黒板上に掲示し、小中連携を進めていく。

- ・学習コーナーの常設

職員室前に長机を設置し、先生へ質問するスペースとしても活用する。

- ・読書活動について

思考力の基となる読解力を育成するなどの効果を期待し、朝読書の時間を設定したり、読書コーナーを設置したりする。1年生は図書館オリエンテーションを受けてから、図書館を利用する。また、授業内容に関係がある書籍やより発展的な内容に関する書籍を展示する。

〔授業力向上〕

- ・教科部会の活性化

教科部会で授業の進め方や学習指導案、指導する際の課題等の検討を行う。これらのデータを蓄積し、実践の質の向上を図る。教科部会の時間は時間割に組み込み、確実に行われるようにする。

- ・共通実践の授業参観

不思議のタネを使った授業を行う際、職員室のモニターなどを使って実施を共有し、時間が空いている教員が参観を行う。その後は意見交換を行い、実践から授業力の向上を図る。

- ・校内サポート塾

「不思議のタネ」の作り方や授業の展開の仕方など、悩んでいることや困っていることを意見交流する場をつくる。参加は自由にし、不定期に1回20分から30分程度放課後に話すことで、実践する上での不安を解消することを目指す。

(3) 若手教員の育成

①校内で組織体制を整備し、計画に基づいて若手教員の研修を実施する。

②日常的なOJTを教科、学年、校務分掌部会を中心に実施する。

③本校の教職員が講師を務める「ひまわり塾」を月一回程度実施し、授業力の向上、学級経営力の向上、校務分掌力の向上を図る。

④教科部会や相互参観の実施を通じて授業力向上を図る。

6. 検証の方法

ア 研究推進委員会、教科部会、学年会で検討、協議を行う。

イ アンケートの活用

原則年間2回、生徒によるアンケート、教師によるアンケートをそれぞれ実施・分析し、課題に対しては改善策を検討する。

7. 研究の組織

定例の研究推進委員会で協議、企画の立案、提案を行う。「学力向上推進」と「授業力向上推進」の役割を意識し、効果的に運用する。

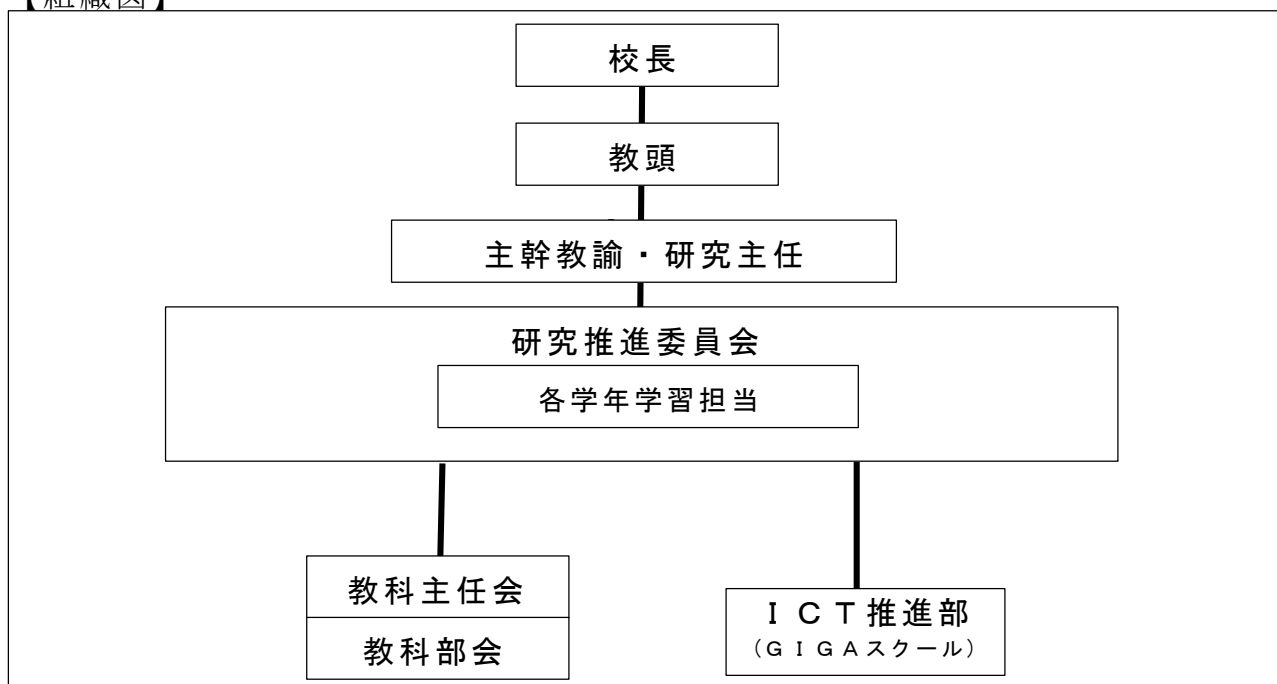
ア 「学力向上推進」

- ・学力調査等の分析および対応策を生徒の実態を考慮し、提案する。
- ・家庭学習の充実等を生徒の実態に即して提案する。
- ・定期テスト、実力テスト等の結果から、学習内容の習得状況を確認し、教科と学年から改善策を提案する。(補充学習等)
- ・学力調査等に向けての対策を計画し、学力の現状を把握するとともに対応策の提案をする。
- ・学力向上の取組について各学年と情報交換し検討する。

イ 「授業力向上推進」

- ・生徒による授業アンケートの実施について提案し、結果を集計し、分析および改善策について教科で共通理解し実践する。
- ・授業改善セルフチェックシートの集計および改善策について全教員に提案し、共通理解し実践する。
- ・生徒による学習についての自己評価アンケートを実施し、その結果を集計、分析し、授業改善の取組を学年に提案し、学年で共通理解し実践する。

【組織図】



8. 年間計画

月	学校全体研究会	学 年 研 究 会	教 科 研 究 会	研究推進委員会	
4月	○学校研究の方向性と取組の共通理解 ○研究全体会	○学年経営方針の決定 ○学年経営案の作成	○教科研究テーマの決定 ○年間指導計画の確認	【学力向上】 ○学力向上の取組の検討 (教科部会、学年部会) ○1学期学力向上の取組の提案	【授業力向上】 ○アンケート項目の確認 ○校内サポート塾
5月	○校内研修会 (外部講師招聘)	○学年集会で学習の確認 (4～5月)	○公開研究発表会に向けて教科部会で取り組みを検討 ○公開研究発表会に向けて学習指導案の作成・実践 (～10月中旬)	○1学期中間テスト前の取組の確認、実施	○校内サポート塾
6月	○小中一貫教育の日		○評価及び評定方法の共通理解	○1学期末テスト前の取組の確認、実施	○校内サポート塾
7月		○生徒の授業アンケートの実施 ○生徒の授業アンケートの結果を踏まえた改善策検討	○授業アンケートの実施 ○授業アンケートの分析と考察 ○公開研究発表会に向けた授業デザインの検討	○生徒の学力の実態の把握と対応策の検討 ○夏期休業中の学力向上対策 ○1学期学力向上の取り組みの検証	○教師の学力向上の取組アンケートおよび生徒の授業アンケートの実施と集計 ○校内サポート塾
8月	○校内研修会 (外部講師招聘)	○1学期の検証と2学期の取組の確認	○1学期の検証と2学期の取組の確認 ○公開研究発表会中心授業の模擬授業	○学力調査等の分析および対応策 ○2学期学力向上の取組の提案	○1学期の振り返りと課題への対応策の検討
9月				○2学期中間テスト前の取組の確認、実施	○校内サポート塾
10月			○公開研究発表会に向けて学習指導案の検討・提出	○野田中校区内で学力分析の情報交換	○校内サポート塾
11月	○公開研究発表会 (外部講師招聘)		○公開研究発表会での公開授業の実施 ○研究協議会の実施および成果と課題の検討	○2学期末テスト前の取組の確認、実施	○校内サポート塾
12月	○研究紀要について確認・提案	○生徒の授業アンケートの実施および結果を踏まえた授業の取組の改善策検討 ○2学期の検証と3学期の取組の確認	○授業アンケートの実施 ○授業アンケートの分析と考察 ○次年度教育課程の検討 ○2学期の検証と3学期の取組の確認	○2学期学力向上の取り組みの検証 ○評価問題分析と対応策検討	○教師の学力向上の取組アンケートおよび生徒の授業アンケートの実施と集計 ○校内サポート塾
1月	○校内研修会 (外部講師招聘) ○研究紀要の編集			○3学期学力向上の取組の提案 ○評価問題分析と対応策提案	○校内サポート塾
2月	○来年度の研究の方向性	○本年度の反省	○本年度の反省	○3学期学力向上の取組の検証 ○学年末テスト前の取組の確認	○今年度の成果と課題の確認 ○校内サポート塾
3月	○研究紀要の完成(上旬)	○本年度の成果のまとめと次年度の課題の確認	○次年度の教育課程編成	○次年度へ向けての対応(学力向上の取組の検討)	○次年度へ向けての対応策(授業力向上の取組の検討)

〔通年〕 共通実践の授業参観 / 若手教員早期育成プログラムの実施

9. 研究経過

問いを創る授業を重点事項として、年間計画にもとづいて各種の取組を実施してきた。以下、(1)～(4)で、全教員で参加した授業研究協議会や公開研究発表会等について述べ、(5)で若手教員育成プログラム「ひまわり塾」について述べる。

研究活動報告書

(1) 研究全体会：令和7年4月4日（金）

「問いを創る授業」についての共通理解を図り、模擬授業を通じて実践的な学びを深めた。年度当初に、今年度の学校研究の重点と、「問いを創る授業」についての共通理解を図った。その後、問いを創る授業の手順やルールの意味について考える初回問いを創る授業の模擬授業を行った。この授業と同じ流れで4月14日（月）に全学級で生徒対象の授業を実施した。

1年生は「私たちの中学校では授業2分前着席することで成績が伸びた」、2・3年生は「ペーパータワーにはチームで大切なことが詰まっている」を不思議のタネとし、疑問を創り、絞り、使う活動を一通り行った。またその中でルールの意義を考える活動や閉じた質問・開いた質問について違いを学ぶ活動を行った。

【問いを創る授業のルール】

- ・できるだけたくさん問いを創る
- ・問いについて話し合ったり、評価したり、答えたりしない
- ・人の発表は最後まで真剣に聴く
- ・意見や主張は疑問文に書き直す

(2) 第1回校内研修会：令和7年5月22日（木）

立正大学教授鹿嶋真弓先生の指導のもと、前半は探究学習に向けた「不思議のタネ」を考えるワークショップ、後半は理論を深める講演を行い、実践と理論の両面から研修を深めた。

前半のワークショップでは、今年度の探究の時間で活用する「不思議のタネ」の案を学年ごとに協議、検討を行った。教科の枠を超えた視点や、生徒の知的好奇心を揺さぶるスポットライトについても協議し、鹿嶋先生から「大人がまず面白がること」「解決できなくても考え続けること自体に価値がある」といった具体的な助言をいただいた。

後半の講演では、「探究学習・問い創り」をテーマに、正解のある「ジグソーパズル型学力」から、知識を組み合わせて独自の価値を生み出す「レゴ型学力」への転換が必要であることや、AIを単なる道具として使いこなしつつ、人間ならではの「問いを抱く力」や「情報編集能力」を育成する重要性が説かれた。また、「不思議のタネ」を活用して問いを創るプロセスや、課題発見におけるクリティカルシンキングの重要性についても共通理解を図った。

(3) 第2回校内研修会：令和7年8月25日（月）

国語・理科・英語の3教科による研究授業と、鹿嶋真弓教授による講義「問いづくり・主体的学び・探究型教育」を実施した。

研究授業では、各教科で「不思議のタネ」と「スポットライト」を用いた授業実践が行われた。国語科では「見る人による視点の違い（ルビンの壺・最後の晩餐）」、理科では「ジェットコースターを用いた力学的エネルギー保存の法則（理想と現実のギャップ）」、英語科では「できないことが多すぎて楽しかった（パラアスリートの言葉）」を題材に、生徒の知的好奇心を揺さぶり、主体的な問いを引き出す多角的なアプローチが試みられた。

講義では、生徒自身が問いを抱き、学びに向かうことの重要性が説かれた。また、問いを単なる疑問で終わらせず、探究へとつなげるための「問いの保持・蓄積（付箋やファイル活用）」や、その評価方法（ループリック）についても具体的な提案があった。

（４）公開研究発表会：令和７年１１月１４日（金）

公開授業では、国語・数学・理科・英語の各教科において「不思議のタネ」から「スポットライト」へと続く授業構成により、生徒の知的好奇心を揺さぶる実践が行われた。理科ではジェットコースターを題材としたエネルギー変換、国語では「比べ読み」の手法を用いるなど、各教科の特性を生かした授業が展開され、生徒が生き生きと課題に取り組む姿が見られた。

研究協議会では、生徒参加型ポスターセッションを体育館で実施した。授業者と参加者に加えて代表生徒２名も協議に参加し、授業の意図と生徒の受け止め方のズレや一致が明確になるなど、生徒の「生の声」を通じた多角的な分析が見られ好評であった。

鹿嶋先生の講演では、AI時代においてこそ「問う力」が人間にとって重要であることや、分からないことを自覚する「不知の自覚」の重要性が説かれた。また、「ヒントはひらめき泥棒」であるとして、教師が教えすぎず、生徒のモヤモヤ（認知的不協和）を大切にする授業デザインの在り方について理論と実践の両面から学びを深めた。

（５）第４回校内研修会：令和８年１月２７日（火）

「問いを創る授業」の更なる深化を目指し、道徳科における模擬授業、教科横断的な情報共有、鹿嶋真弓教授による講演の三部構成で実施した。道徳科の模擬授業では『いつわりのバイオリン』の教材を扱い、教員が生徒役となり、「幸せな詐欺師」や「不幸せな正直者」といった矛盾を持った題材を用いて、意図的に「モヤモヤ（認知的不協和）」を生じさせ、そこから問いを引き出すプロセスを体験した。参加者からは「矛盾から多様な発想が生まれる有効性を実感した」との声が上がる一方、「道徳的価値項目への迫り方や本題への繋ぎ方が難しい」といった実践的課題も共有され、活発な協議が行われた。続くグループワークでは、各教科で考案された「不思議のタネ」や探究活動のアイデアを共有し、「他教科の実践を知り視野が広がった」「モヤモヤこそが問いの出発点だと再確認できた」といった感想が多く聞かれた。また、生徒が主体的に楽しむための「ゲーム」としての場の工夫についても議論が深まった。

鹿嶋教授の講演では、これらの実践が「場の工夫」「ゲーム」「教師の声かけ」の視点で理論づけられ、教師自身が共に面白い姿勢こそが「内発的動機付け」の鍵であると説かれた。さらに、問いを広げる「メタラーニング」や「ねらいの語尾を変える」手法が紹介され、生徒の思考の脱線を恐れず、深い学びへ繋げる意識変革が促された。

(5) ひまわり塾

若手教員早期育成プログラムの一つとして、若手教師を対象に、校内の人材（ICT サポーターや SC も含む）を講師に迎え、1 カ月に 1 回程度、業後約 20 分間実施した。昨年度末に若手教員に行ったアンケートをもとに、「生徒指導」「道德教育」など各回異なるテーマで計画・実施した。

10. 取組の検証・まとめ

年間 2 回、生徒・教師によるアンケートを実施した。また、結果は各種調査の結果とともに研究推進委員会を中心に検証した。アンケート項目の重点的な取組に関する設問とその結果は以下のとおりである。

〔生徒による授業アンケート〕 肯定的回答の割合

① 全体項目別 A 評価のみ

	R7 前期	R7 後期	増減
主体性・意欲	49.9%	50.7%	+0.8pt
対話・協働	51.8%	54.7%	+2.9pt
思考・活用	46.7%	49.3%	+2.6pt
振り返り・実感	54.5%	55.0%	+0.5pt

- ・主体性・意欲：自ら問いを創ることで意欲的・積極的に学習に取り組めましたか。
- ・対話・協働：自分の考えを伝えたり、他の人の考えを聞くことで新たな考え方に気づいたりすることができましたか。
- ・思考・活用：学習課題や自分の立てた問いの解決に向けて、学んだことを関連付けて考えることができましたか。
- ・振り返り・実感：自分の学びを振り返って、新しいことがわかった・できるようになったと感じますか。

項目別では「対話・協働」が+2.9pt と最も大きな伸びを示した。また、「思考・活用」においても+2.6pt の上昇が見られ、問いを創る活動を通して、生徒たちが他者との関わりの中で考えを深めている様子がうかがえる。

② 学年別 A 評価のみ 前期 → 後期

	主体性・意欲	対話・協働	思考・活用	振り返り・実感
1 年	48.3% → 47.8%	50.3% → 54.2%	45.8% → 44.4%	56.7% → 55.9%
2 年	53.8% → 51.6%	55.3% → 54.7%	50.2% → 47.6%	58.4% → 56.1%
3 年	48.2% → 52.2%	50.4% → 54.8%	44.6% → 50.1%	49.8% → 52.9%

第 3 学年の変容が著しく、全 4 項目で数値が向上した。特に「主体性・意欲」は+4.0pt の上昇、「対話・協働」は+4.4pt と大きく伸びた。これは進路実現に向けた学習意欲の高まりと、授業での協働解決スタイルの定着による成果である。一方で 1・2 年生は「対話・協働」以外が横ばい傾向にあり、各段階に応じた支援継続が課題となる。

教科別の分析では、各教科の特性に応じた成果が数値に表れた。保体・理科においては、「主体的な学び」が A 評価 55% 以上の高い水準で定着していることが確認された。保体や理科では年間を通して「主体性・意欲」の項目で 50% 代後半の A 評価を維持し、実技や実験・実習を伴う活動が、生徒の学習意欲を常に高いレベルで支えていることがわかる。また、国語・英語においては、言語活動による「対話力」の向上が顕著であった。「対話・協働」の項目を見ると、国語で 60.2%（前期比+4.9pt）、英語で 56.8%（+5.0pt）と大幅に上昇しており、これは問いの共有が単なる意見交換を超

え、他者の考えを通して「新たな気付き」を促した結果と言える。さらに、社会・数学では、既習事項をつなげる「思考力」の深化が見られた。「思考・活用」の項目において、社会が 48.0% (+3.7pt)、数学が 50.8% (+2.8pt) とそれぞれ伸長しており、問いの解決過程で知識を活用する思考が、学習への前向きな態度にも還元されていると推察される。

③ リフレクションアンケート 5 + 4 評価 (5 評価)

	R7 1 学期	R7 2 学期
互いに認め合い、対話する	80% (34%)	83% (30%)
感じたことを素直に表現する	76% (33%)	80% (32%)

肯定的な回答は依然として高い水準を維持しているものの、最上位の A 評価の割合は 1 学期と比較して減少傾向が見られた。これは、人間関係の深まりによる配慮や葛藤、あるいは生徒自身が求める「対話」の質が高まり自己評価が厳しくなったことの表れと推察される。

〔教師によるアンケート〕 肯定的な回答の割合

・ 問いを創る授業に関する内容

単元に 1 回は問いを創る授業を行ったか 1 学期：68% 2 学期：63%

・ 探究活動に関する内容

生徒が創った問いをもとにレポート等を作成したか

1 学期：53% 2 学期：50%

・ 「構成的グループエンカウンターを月 1 回行ったか」

令和 7 年度 1 学期：4 月 65%、5 月 45%、6 月 50%、7 月 35%

2 学期：9 月 67%、10 月 50%、11 月 50%、12 月 56%

アンケート結果からは、授業改善への意欲的な姿勢が読み取れ、生徒が自ら疑問を持ち深く学ぶようになったという手応えが報告されている。一方で、授業内で探究活動につなげる時間を確保することの難しさも課題として浮き彫りとなった。

アンケート結果の分析から、「問いを創る」活動は、生徒の「対話・協働」の意識を高め、思考を深める上で有効であることが検証された。特に 3 年生における数値の向上は、問いの解決過程で知識を活用する思考が、学習への前向きな態度に還元されていることを示している。またリフレクションの結果は、生徒が単なる仲良しグループから、真に協働できる集団へと成長する過渡期にあることを示唆している。今後は、検証により明らかになった生徒の確実な変容と教員側の手応えを土台とし、「問いを創る」プロセスそのものを生徒に委ねる時間を恐れずに確保していきたい。教員主導から生徒主体へのシフトチェンジをできるよう、研究部や教科部会を中心に実践を積み重ねていきたい。

Ⅱ 各教科の実践

【国語科】

研究テーマ

「自ら疑問を持ち、思考の過程や根拠を適切に表現する力を養う」

1. 研究テーマ設定の理由と実践にあたって

国語科として続けてきた研究「根拠をもとに思考する生徒の育成」を継続し、さらに本校の研究テーマを踏まえた上で、昨年度より新たに「自ら疑問を持ち」という言葉を付け加え、より主体的に思考する生徒の育成を目指し、研究テーマを設定した。

自ら疑問を持つための仕掛け、根拠をもとに思考する仕掛け、さらには自らの考えを適切に表現するための仕掛けを教科部会で協議し、授業実践を交流しながら研究を推進した。

2. 具体的な取組

< 1 年 >

○取組

「不思議のタネ」を提示し、生徒が自ら疑問を持ち、それについて考えられるようにした。「はじまりの風」「大人になれなかった弟たちに……」「星の花が降る頃に」では、単元の最初の授業で題名をそのまま「不思議のタネ」として提示した。

「蓬萊の玉の枝—『竹取物語』から」では、単元の最初と最後に同じ「不思議のタネ」を提示することで、生徒自身が学んだことを整理すると共に、より深い疑問を持ち、自分なりの考えを構築したり、探究心を持ったりできるようにした。また、スポットライトを活用することで、拡散した問いを絞った。

○成果と課題

問いを作って共有することで、授業を自分事として捉え、自分の中で生まれた問いだけでなく他者の問いに関しても自分なりの考えを持つ姿が見られた。「不思議のタネ」は単元の最初に提示することが多かったが、単元の振り返り際には、そのとき出した問いについて考えたことだけでなく、授業を終えて新たに考えたことや疑問に思ったことを書いており、自ら学びたい、調べたいという気持ちになった生徒が多かったように思う。また、「蓬萊の玉の枝—『竹取物語』から」では、「現存する日本最古の物語」という問いを単元の最初と最後に提示した。最初は作者や物語の内容についての問いが多かったが、単元の最後には、最初の問いに「今も読み親しまれている」というスポットライトを追加してもう一度考え直すことで「なぜ今も読まれているのか？」という疑問が生まれていた。授業を受ける前と受けた後での自分の考え方の変容にも気付きながら、より深い学びにつながったと思う。

< 2 年 >

○取組

生徒が自ら疑問を持つために、「不思議のタネ」を提示した。さらに、「不思議のスポットライト」を提示し、拡散した問いを絞る・再構築するタイミングを作り、問

いの解決をより深化したものになるよう取り組んだ。

他者と共有するときや発表をする際、根拠を明確にするために、調べたことをスライドにまとめ、根拠を持った発表を意識できるようにした。

○成果と課題

・成果

「不思議のタネ」から多くの問いを創ることができるようになってきた生徒が多いが、中身がない状態になっていることもあった。そのため、「不思議のスポットライト」を提示し、問いを再構築することで、自身の問いを見返し、生徒にとってより良い問いを創ることに繋がった。学校図書館にキャッチコピーを作る授業では、不思議のタネ「図書館のキャッチコピーを作成することで、来館者が増える」だけでは、問いを焦点化できていないが、不思議のスポットライト「あなたは、図書館を運営する司書の先生です。」と立場を与えることで、現在の図書館では、どのような取り組みをしていて、どのような図書館にすれば来館者が増え、どのようなキャッチコピーが良いのかということを立場を意識して考えることができていたため、深い学びに繋がっていると感じた。

・課題

「不思議のスポットライト」を提示することにより、深く探究できるようにはなったが、自分で作った問いを深めることが目的となり、他者と共有する時間を授業の中で取る必要性が感じられなくなってきた。他者との共有をより良くするために、形式的ではなく、「聞きに行きたいから、共有する」という雰囲気を作っていきたい。

< 3 年 >

○取組

各単元に1回「不思議のタネ」を提示し、生徒自ら問いを立てる授業を実践した。

導入に「不思議のタネ」を盛り込んだ授業では、まず、自らが疑問に思ったことを自ら調べ、調べたことからさらに疑問を持った点において深く掘りさげながら探究し、その結果を伝え合う活動を取り入れた。級友の疑問や探究結果を知ることで、展開における深い学びにつなげ、終末では、導入時に自分の立てた問いに対して改めて考えさせた。

○成果と課題

「不思議のタネ」をきっかけとして立てた問いに対する自らの探究は、大変興味深い学習であったようで、その交流活動は充実したものとなった。今年度は新たに、「不思議のタネ」から生まれた生徒一人ひとりの問いを、学習課題として1つに絞る前に、まず各自で調べ、探究する時間を設けた。自分の問いに対する探究活動であったため、興味が尽きることなく深く掘り下げて調べていた。その結果を交流することで、さらに疑問が生まれ、そこから学習課題を絞り、国語科としての授業のねらいに迫る学習に向かっていった。

各自が自分の興味関心を探究する学習を導入としたため、単元を通して興味が持続したことと、今までは学習しないような内容まで深く考察することができたことが成果といえる。

しかし、今後の課題として、各自の問いに対して、各自が探究していくため、その情報の正確性をどこまで担保できるか、情報リテラシーも含めてデジタル科の学習も生かしながら考えていく必要がある。

【社会科】

研究テーマ 「対話指導の工夫による論理的な思考力の育成」

本校生徒は社会科の学習において複数の資料に基づきながら考察する課題を苦手としている。また自ら筋道を立てて説明することにも抵抗を感じる生徒もいる。これらの課題や状況を解決するためには「論理的な思考力」の育成が不可欠である。論理的な思考力の育成のためにこれまでも授業に取り入れてきた対話活動に着目した。授業の中で相手に伝えるための言語化や異なる視点からの意見を照らし合わせる活動は、「論理的な思考力の育成」に有効であり、根拠をより強固にする多面的・多角的な考察につながると考えた。

以上により、社会科では学校全体で取り組む「不思議のタネ」の活用に加え、「論理的な思考力」を育成するための対話活動の工夫を研究テーマとした。

○具体的な取組

- ・授業内で複数の資料を提示し、関連付けて考察させる。
- ・生徒の状況を把握し、問い返しを行い、思考の足場かけにより、思考の働きを助ける。
- ・対話の中で根拠を明確にさせ、自分の考えを言語化させる。
- ・単元に1回以上「不思議のタネ」から生徒自ら問をつくり、課題設定を行う場面を設けた。

○成果と課題

各学年ともに日々の授業で複数の資料を提示して、それぞれの資料を関連付けて考察させることができた。また、「不思議のタネ」授業を使った授業では、社会科全体の授業アンケートの結果を前期・後期で比較すると、「自分の考えを伝えたり、他の人の考えを聞くことで新たな考え方に気づいたりすることができましたか」の項目では、肯定的評価（A・B）は9割を上回った。日頃の課題設定の工夫や対話指導が影響していると考えられる。複数の資料を基に考察し、対話活動で思考を深めるといった習慣が生徒に定着してきたと考えられる。また「自ら問いを創ることで意欲的・積極的に学習に取り組めましたか」においても肯定的評価（A・B）は9割を超えることができた。

一方、授業中の生徒の様子を観察から、対話活動を通して「わかった」「なるほど」といった思考が深まった場面はあったが、論理的な思考力の育成という点では十分な成果をあげられなかったと感じている。対話の中で「訊き合う」場面は増えたが、考えの根拠が乏しいまま話し合いを継続する場面も見受けられた。今後、対話の必然性を確保、安心して対話を行える環境づくりが必要であり、「不思議のタネ」を用いて、根拠をもとに筋道を明確化させ、対話を活性化させる積極的な指導の充実が今後の課題である。

【数学科】

研究テーマ 「数学的活動を通じて、問い続ける力の育成」

○具体的な取組

年間を通じた継続的な取り組みとして：

(1) 実生活・体験と結びついた数学的活動の実施

各単元において、少なくとも章に1回以上、体験や日常生活に関連した「不思議のタネ」を提示し、生徒が実生活との繋がりを実感しながら問いを深められるよう工夫する。

(2) レポート作成での取り組み

それぞれの分野でのレポートを作成し、質的变化を分析する。

○成果と課題

1学期の検証として、4月と7月に生徒が書き出す「問い」の数を計測したところ、平均2個後半から3個程度、多いクラスでも4個程度と劇的な変化は見られなかった。この結果から、問いの数を増やすだけでは「問い続ける力」の育成には直結せず、問いの質を高める指導が必要なのではないかと考えた。そこで2学期以降はレポートを作成する際には、問いを選んだ動機の明確化、さらにレポート作成後に生まれた新たな疑問を記述させることで、探究サイクルの確立を目指した。

1年生では、単元の導入段階で実生活や体験と結びついた活動（平面図形のしきつめ、空間図形での立体づくり等）を取り入れた。これにより、活動の中から生徒自らが問いを見出す姿も見られた。またレポート作成では1学期の正負の数、2学期の比例と反比例で探究レポートを作成した。比例・反比例の授業の中でグループで日常の事象のなかから比例反比例を見つける時間をとった。その事例が比例や反比例の関係であることをレポートで確かめる生徒も見られた。単なる要約に留まらず『他者への伝わりやすさ』を意識した記述など、思考・判断・表現の深化が見られるようになった。

2年生は、1年生の頃から、様々な場面で問いをいくつも創ってきた経験が活かされ、2分間でいくつもの問いを創ることができる様子が各学級で見られるようになってきた。レポート作成では、各章ごとにその章に関連した問いを1つ創らせ、問いの設定の理由と得られた結論を書かせた。優秀なレポートは各学級で披露し、創った「問い」のどの点が興味深いものとなっていたかを教師が確認しながら、鑑賞するよう指導した。その結果、興味深い問いの作成、その設定の理由、得られた結論を、数学的な根拠を明らかにしながら説明できる生徒がずいぶん増えてきたように思われる。限られた時間で問いを創る数は、停滞する結果となり、今後の課題の1つであるといえるが、創った問いの質的な変化はレポートの内容からも見られるため、その点は成果であったともとらえている。

3年生では「相似な図形」の単元において、実際に相似な図形の性質を利用して校舎や木の高さを求めたり、錯視の模型を創作したりする探究活動を行った。こうした実感を伴う活動が生徒間の協働的な対話を自然と促す結果となり、「自分の考えを伝えたり、他の人の考えを聞くことで新たな考え方に気づいたりすることができました

か。」のA評価は62.6%と高い数値であった。また、レポート作成では、1学期の計算分野、2学期の関数分野で探究レポートを作成した。2学期は「問いの構築と深化」「探究の過程」「振り返り」の3観点からなるルーブリックを設定し、生徒が自ら探究を客観視して質を高めることを目指した。レポートの記述内容において、「定義の確認」から「理由の探究」へと質的な深まりが確認できた。一方で、自ら立てた問いに基づいてレポートを仕上げることに困難を感じる生徒も多く、自分の問いから探究につなげる方法は今後の課題である。

【理科】

研究テーマ 「自我関与を促し、学びを深化させる指導法の工夫」

○研究テーマ設定の理由

理科は日常生活との関わりが深く、生徒がこれまでに培ってきた「経験知」と、授業で学ぶ「科学的根拠」が衝突した際に、強い知的好奇心が生まれる教科である。昨年度に引き続き、学習内容に関連した「不思議のタネ」を提示し、生徒自らが問いを創る授業を展開する。「不思議のタネ」から生まれた問いは、教師から与えられた課題ではなく、生徒自身の内発的な動機に基づいたものとなる。自ら立てた仮説を実験で検証し、結果を客観的に分析・考察する過程に「自我関与」させることで、既存のものの見方や考え方をアップデートし、より深い学びへとつなげていくことを目指し、本テーマを設定した。

○指導力向上のための共通実践

今年度は、個々の授業実践に加え、組織的な指導力向上を目的として以下の3点を共通実践事項とした。

- ・「問いをつくる授業」の定着と改善

各学期に1回、研究授業として「問いをつくる授業」を実施。授業後の協議会では、生徒から出された問いの質や、その後の学習へのつながりについて成果報告と改善案の検討を行った。

- ・見取りの工夫による変容の可視化

振り返りシート、行動観察、発表レポートにおいて、生徒の思考がどう変容したかを的確に捉えるための評価基準（ルーブリック）の作成や、記録方法の共有を行った。

- ・誰もが参加できる実験環境の構築

器具の配置や役割分担の明確化、ICT機器を活用した顕微鏡の映像共有や天体のシミュレーションなど、実験が苦手な生徒や心理的ハードルを感じる生徒も臆せず参加できるユニバーサルデザインの視点を取り入れた環境整備を推進した。

○具体的な事例

【1年生】単元「いろいろな生物とその共通点」

課題：動物の仲間分けをするために何に着目したらよいか

導入において「動物カードゲーム（質問を通じて相手の持つカードを当てるゲーム）」を実施した。ゲーム開始前に「動物を当てるために有効だった質問やヒントは何か」を意識させたことで、生徒は「脊椎の有無」や「生活の場所」といった生物学的分類に不可欠な視点に自ら気づくことができた。振り返りでは、他の動物群にも適用できる共通の分類軸について活発な議論が交わされた。

【2年生】単元「日本の天気と季節風」

課題：海風・陸風のメカニズムを説明しよう

「不思議のタネ」として、晴れた日の昼間に阪神甲子園球場で見られる「ライト方向への打球が押し戻される現象（浜風）」を提示した。生徒からは「なぜライト方向（海から陸）なのか」「夜はどうなるのか」という問いが生まれた。海陸風の学習後、これらの問いに対して学んだ用語を用いて説明させることで、気圧差と風の仕組みについての理解がより強固なものとなった。

【3年生】単元「エネルギーと仕事」

課題：コースターの運動からエネルギー保存と損失を考える

身近な遊園地（富士急ハイランドと手取フィッシュランド）のジェットコースターを比較し、後者の設計が「力学的エネルギー保存の点で優れている」という不思議のタネを示した。生徒は「なぜ手取フィッシュランドのコースターの方が優れていると言えるのか」「エネルギーはどう変化しているのか」という疑問を持ち、探究の過程で、摩擦や空気抵抗によるエネルギー損失という概念に、実感を持って注目することができた。

○成果と課題

【成果】

- ・「不思議のタネ」を用いた導入により、全学年で「なぜ？」という問いが自然発生し、学習に対する積極性が高まった。特に1年生のカードゲームを活用した導入は、実験への心理的障壁を下げる効果が見られた。
- ・2・3年生の事例のように、身近な事象（野球場や遊園地）と学習内容を紐付けることで、知識が「生きたもの」として定着した。
- ・定期的な授業検討会により、生徒の小さな変容（見取り）を共有する文化が定着し、指導の改善が迅速に行われるようになった。
- ・生徒アンケートの結果は肯定的な回答が95%前後と非常に高く、生徒が意欲的に学習に取り組んでいる様子が伺える。

【課題】

- ・生徒から出た多様な問いを大切にすゝるあまり、年間計画との調整が難しくなる場面があった。学習指導要領の核となる部分と、生徒の興味をどうバランスよく配置するかが今後の課題である。
- ・行動観察などの質的な評価を、いかに客観的な成績評価に反映させるかについて、さらに協議を深める必要がある。

【音楽科】

研究テーマ「互いに自信をもって表現活動に取り組める授業づくり」

研究テーマと設定理由

生徒が音楽を通じた創造的な活動や、他者との協働を促進することで、感性や表現力を高め、自信をもって自らの表現活動へと結びつける力を育むことをねらいとした。また、単なる知識・技能の習得だけでなく、思考力や創造力を深める学びが、生徒の自己表現やコミュニケーション能力の向上に直結すると考え、個人の感性を尊重しつつ、他者と共有し協働する力を養うことの重要性を踏まえて設定した。

○具体的な取組

1. 「不思議のタネ」を用いた、問いを創る授業の実施

各学期に各学年1回以上、「不思議のタネ」を用いて問いを創る授業を実施した。これにより、生徒が題材に対して興味関心を高め、音楽に主体的に向き合う姿勢を身につけることを目指した。

1年1組 - 歌詞の内容							
①この曲の歌詞の利 でかしているのか、と いって思っています。 →そこがこれの人を見 聞かされた。	②自分の力で書く とはどういう意味 なのか	③自分のちからで書く とは？	④必ず自分で書く かなければいけない のか	⑤「自分だけが書く か、それともみんな で書くのか」	⑥「自分だけが書く か、それともみんな で書くのか」	⑦「自分だけが書く か、それともみんな で書くのか」	⑧「自分だけが書く か、それともみんな で書くのか」
⑨自分の力で書く とはどういう意味 なのか	⑩自分のちからで書く とは？	⑪必ず自分で書く かなければいけない のか	⑫「自分だけが書く か、それともみんな で書くのか」	⑬「自分だけが書く か、それともみんな で書くのか」	⑭「自分だけが書く か、それともみんな で書くのか」	⑮「自分だけが書く か、それともみんな で書くのか」	⑯「自分だけが書く か、それともみんな で書くのか」
⑰自分の力で書く とはどういう意味 なのか	⑱自分のちからで書く とは？	⑲必ず自分で書く かなければいけない のか	⑳「自分だけが書く か、それともみんな で書くのか」	㉑「自分だけが書く か、それともみんな で書くのか」	㉒「自分だけが書く か、それともみんな で書くのか」	㉓「自分だけが書く か、それともみんな で書くのか」	㉔「自分だけが書く か、それともみんな で書くのか」

2. 学習形態の工夫

個人思考からペア・グループでの交流、全体共有という流れをパターン化し、生徒同士が互いに影響を与えながら学びを深める場を適宜設定した。生徒は自身の考えを整理し伝え、また他者の意見を聞くことで、自身の考えを深めたり、新たな気づきを得たりすることができた。

3. 振り返り活動

題材ごとの振り返りや学期末の授業評価アンケートの結果から、生徒の学びの変容を見取った。この結果をもとに、授業構成や指導方法の改善を図ってきた。

○成果と課題

授業アンケートの結果は全体的に肯定的な評価が高く、特に「自分の考えを伝えたり、他の人の考えを聞くことで新たな考え方に気づいたりすることができた」の項目のA評価が全学年5割を超えていた。このことから、多様な考え方を知ることによってどんな考えも大切だということを感じ、自分の意見にも自信をもって伝え合うことができるようになったと考える。不思議のタネを通じて、音楽に対する興味関心が高まり、題材への理解が深まったという声が多く寄せられ、授業中のグループ活動や全体共有を通じて、生徒同士が積極的に意見を交わし、協働的な学びの場が広がった点も成果と

して挙げられる。一方で、「課題や問いの解決に向けて学んだことを関連づけて考えることができた」の項目は前期よりA評価が上昇したものの、4割程度に留まった。特に1年生において知識と表現を結び付けることに課題が残った。授業時間の制約によって、振り返り活動の時間を十分に確保できない場合もあり、これが学びの深化を妨げる要因となっているため、限られた時間の中で効果的な振り返りを実現する手法を工夫していく必要がある。

【美術科】

研究テーマ「互いに自信をもって表現活動に取り組める授業づくり」

研究テーマと設定理由

生徒が自分自身の表現活動に主体的に取り組む力を養いながら、他者の意見や視点を取り入れることで、より豊かな創造性を発揮できるようにすることを目指している。美術は個々の表現が重視される一方で、他者との交流を通じて新たな視点を得られる場でもある。交流を通じて、自己表現の幅を広げ、作品に自信を持つことができるような教育環境を構築する必要性から、このテーマを設定した。

○具体的な取り組み

1. 発想段階での交流の強化

作品制作における発想やアイデアスケッチの段階で、意図的に交流の場を設けた。生徒同士がアイデアを共有し合うことで、他者の視点を学び、自分の作品に反映させる機会を増やした。

2. 課題設定の工夫

題材の内容や方法を慎重に検討し、題材導入時には興味関心を持って取り組めるようにした。特に、発想段階から完成までのプロセスが自然につながるよう、段階的に取り組みやすい課題を設定した。

3. 成果物の共有

授業の中で生徒同士の製作途中の作品を鑑賞する機会を作り、フィードバックを行う時間を設けた。他者からの意見や感想を受け取ることで、自分の作品の価値を再認識し、自信を持つきっかけを与えた。

4. 振り返り活動の導入

授業後に振り返りの時間を設け、生徒自身が取り組みや他者の作品から学んだことを文章化する活動を定期的に行った。これにより、自分の成長や課題を具体的に捉える力を育成した。

○成果と課題

生徒たちの作品制作に対する意欲が向上し、発想段階での交流を通じて、新しい視点やアイデアを得る姿が多く見られるようになった。課題の設定が適切であった場合には、生徒たちの表現が非常に多様性を帯び、作品の満足感や自信が大きく育まれた。作品や振り返り活動が、生徒同士の相互理解を深め、創作意欲のさらなる向上につながった点も大きな成果と言えた。

今後の課題は、一部の生徒には、作品に対する他者の意見を受け入れず、かたくな

になる場面も見られた。また鑑賞の授業を学期中に行うことが難しく、他者の作品を通じて自分の作品を客観視する機会が十分でなかった点など改善の余地があった。

○今後の方向性

生徒が自らの表現活動に活かせるよう、事前にフィードバックの目的や活用方法について丁寧に指導することと、鑑賞の授業を計画的に実施できるよう、授業全体のスケジュールを再構築し、時間配分の見直しを図ります。また題材や課題の設定の再検討を行い、生徒が自信を持って表現活動に取り組める美術教育を実現していく。

【保健体育科】

研究テーマ

「R7 “分かる”と“できる”をつなげる授業づくり ～自分の課題を解決する力の育成～」

体育の授業は、分かることがゴールではなく、分かったことが実際にできるようになることがゴールになる。そのため、どうすれば良いかは分かっている、実現することには困難を感じる生徒も多い。昨年度は、個人種目において種目における具体的な動きやフィードバックで、自分を客観的にみることができるようになるなどの変容が見られた。

そこで、今年度は個人種目だけでなく集団種目においても、「できる」に焦点を当てて授業を進めてきた。集団の中での自分の課題について考えることで、集団への帰属意識も高まり、「分かる」が「できる」につながると考えた。

○具体的な取組

・教え合いの活性化

互いが課題解決を助け合えるように、課題解決のための練習方法やポイントが分かるような資料を提示したり、グループのメンバーや形態を工夫したりして、教え合いが活性化するようにした。また、「友達の効果的なアドバイス」をフィードバックすることで、関わり合いを活性化させた。

・意識の向上

主体的に学習に参加するように、興味関心が高まるような「不思議のタネ」を設定した。特に三年生のバレーボール時に設定した「三段攻撃で得点する」というタネから問いをつくらせ、授業を展開した結果、次のプレーに繋がるために必要なことを積極的に意識する姿が見られた。

○成果と課題

集団種目において、自分がどのように貢献しているのか、また、自分の課題と課題に対する変容は何かをアウトプットすることで、振返りに具体的な記述が見られるようになった。生徒アンケートでも、不思議のタネを用いて課題を設定し解決することで、生徒自身が意欲的に授業に取り組めた様子が窺えた。

しかし、3年生のバスケットボールにおいて「ボールを触らなくても攻撃に貢献でき

る」という不思議のタネを設定し、苦手な生徒でもスクリーンプレーで貢献できることを狙いとしたが、速攻攻撃を多く展開するチームもあり、「わかる」と「できる」ことの繋がりが弱かったため、課題達成のための仕掛けに改善が必要だと感じた。

単元のゴールの設定と精選された仕掛けが、生徒の課題達成の意欲に繋がり、「わかる」と「できる」を繋げていくという方向性は維持し、さらに生徒が課題達成に向けて意欲を高められるような仕掛けを考えていきたい。

【技術・家庭科】

研究テーマ

「生活体験の中での疑問から課題を見つけ、

問題解決に向け主体的に取り組む生徒を育てる」

生活体験が少ない生徒たちは、これから自分たちを取り巻く状況の中で多くの課題を解決して生きていかなければならない。そのために、周囲と良い関係を築きながら協働したり、実生活で学んだことを自分なりに工夫して生かそうとしたりする態度を育てることが必要だと考えている。そのため、学校研究の「不思議のタネ」を生かし、生活の中で様々な視点から課題を見つけ、実習や協働を通して、解決方法にも様々な見方、考え方あることに気づき、何事も自分事と捉えて、生活をよりよくしていく方法を見つけていく力を育てたい。

○具体的な取組

＜技術分野＞

1年生では、生徒にとって身近な内容である情報の技術の学習において、過去に世の中を騒がせたSNSでの不適切な動画のアップロードやバイトテロなどに触れ、適切な利用について考える学習を行った。材料と加工の技術では、構造に関する学習で不思議のタネの授業を実施し、建物や構造物に施された強固にする工夫を気づかせた。

2年生では、生物育成の内容で栽培記録をつける際にクロムブックを活用した。今年度も栽培を2度実施し、1回目の栽培ではなるべく自然光に当てて育てるようにした。2回目の栽培では、学習内容を踏まえて各自が適切に管理し育てるようにさせ、それぞれの栽培を比較した。エネルギー変換の学習で不思議のタネの授業として抵抗、モータ、乾電池、ブレッドボードを使用し、教室にある扇風機のように風の強さを3段階に設定できるようにするには回路をどうつないだらよいかを考えさせた。

3年生の情報の技術では、「プロロボ」によるプログラムの学習に取り組んだほか、「タコラッチ・ミニ」を使用して身の回りの製品をプログラムによって実現するなど、日頃使用している機器のしくみや制御はどのように作られているのかを考え、気づかせるようにした。いずれの学年の授業でも、大型モニターやプロジェクターを活用し、画像や作業の動画を見せて具体例やポイントを押さえるようにした。

＜家庭分野＞

1年生では、「食生活」の分野の導入として、『黄金うんちは最高級！』を不思議のタネとし、様々な疑問を出させた。黄金うんちを出すためには、どのような食事の内容、栄

養、生活の仕方、食べる量、食べ方、献立の内容についての疑問があった。自分が普段食べているもの、食べ方等がすべて関係していることに気づき、食領域の学習の関心の高まりにつながった。また、夏休みの課題として、料理実践やお弁当作り、一日の食事調べなど取り組ませた。最後に、住まいの働きについて、災害を取り上げた。資料として、金沢市の防災マニュアルを使い、災害時の自助、共助の大切さを理解した上で、自分の家の防災対策についてや避難所生活『もし、野田中学校が避難所になったら』という課題で避難所で何ができるかを考えさせた。

2年生では、「消費生活」の分野の導入として『近年、消費者トラブル多発中』を不思議のタネとし、様々な疑問を出させた。なぜ、増えているのか、何が原因なのか、トラブルを回避する方法は等、学ぶべき内容が疑問として上がり、関心を高める導入となった。次に1年の食物領域の課題を生かし、地域の食文化について学び、長期休業中に地域の食材を使った調理の実践を取り入れた。今年は、能登が世界農業遺産であることや全国の中でも食の観光地として日本だけでなく世界中から注目されているのに、自分の食生活の中であまり地域の食材や郷土料理を利用していない、食していない実態を踏まえ「金沢・石川の食文化の魅力を自分の食生活に取り入れるためには」を課題としレポート制作に取り組んだ。どうしたら自分の食生活に金沢・石川の食材や郷土料理を取り入れることにつながるか仮説を立ててテーマを決め、調べ学習をした。生徒の仮説の中には、『まずは知ること』『生産量不足の実態』『安く購入できるようにするには』や能登半島地震にからめ、『能登の酪農の実態』を調べてみるなど様々な視点で調べ学習をしていた。

3年生では、被服実習としてテディベア製作をし、ものを作ることの意義や手作りの良さについて考えさせた。そのテディベアをおもちゃとして持参して幼稚園訪問をし、幼児の特徴について学ぶとともに、青少年期の最後の時期であり、社会の一員として地域の幼児たちとどのように関わっていくかについて学習した。

○成果と課題

<技術分野>

1年生の情報に関する内容では、過去の事例から利用する際の注意点を考え、自らの機器の使用について振り返る機会となった。生徒に実施した情報機器の利用に関するアンケートでは、気をつける点などを挙げている生徒もいるなど、日頃から注意している様子もみられた。材料と加工の技術の不思議のタネの授業では、意欲的に活動し工夫を探ったり見つけたりしようとする姿が見られ、学習内容から校舎の耐震工事などへの理解を深めていた。

2年生の生物育成の内容では、1回目と2回目の栽培を比較する目的で2回栽培を実施したが、1回目は虫の被害が目立った。また、2回目の栽培では気温が高いため、うまく発芽しないものが多かった。一方で、1回目にうまく育たなかった生徒が2回目ではこまめに世話をを行った結果、十分な育成となった場合もみられた。回路学習の不思議のタネの授業では、事前知識をしっかりと与えられていなかったが、ブレッドボードの仕組みを理解し実現できた班もあり、その便利さに気づいたり回路をどうしたらよいかの理解を深めたりしていた。

3年生のプログラムに関する学習ではある程度基本的な内容を理解できたが、理解力の差が見られた一方で、生徒同士で教え合う様子も見られた。「タコラッチ・ミニ」では例題をもとに各自のアレンジを加えたプログラムも多く見られ、ユニークな動作やより実態に合った動作をする製品を実現する生徒が見られた。各学年の不思議のタネの授業を増やすことができなかったため、ちょっとしたきっかけを授業に繋げるようにしたい。

＜家庭分野＞

1年の授業では、自分の食生活を見直し改善点を見つけられた生徒がたくさんいた。夏休み前のジュースの糖度の授業では、『ジュースを飲みすぎてはダメ』と親に言われてきた理由がわかったという生徒も多かった。糖度の非常に高い商品や人工甘味料にも触れ、何で水分補給をすべきか、また水分補給の大切さを理解できたと思う。住まいの学習では、金沢市の防災マニュアルから、基本は自助であることと、避難所の運営は地域住民であることを知り、社会の一員として、「守ってもらう立場ではなく、守る立場であること」を再確認できた。

2年生は、調べ学習、発表会を通して、地産地消の大切さを深く理解することができた。家庭での調理実践にも意欲的に取り組むことができた。また、消費生活の学習では、毎日のように消費者トラブルのニュースがあり、その新聞記事等を取り上げたり、トラブルに巻き込まれた経験を持つ者の体験談を語らせたりすることで、自分の身近に起きることであると実感させた上で学習に取り組み始めることができ、将来のために真剣に学習する姿勢が見られた。

3年生はディベア製作を通して、もの作りの面白さを味わうことができたと思う。年々、工夫をしてベアはでなく、恐竜やうさぎなど違った動物に仕上げる生徒も多くなり、展示することで更に工夫する生徒が増えてきた。また、その手作りのベアを持って幼稚園訪問を行った。幼児と触れ合う機会がない生徒が多く、実習では幼児とうまく関われない生徒もいた。幼児の方から話しかけてくる、近寄ってくると思っていた生徒もおり、幼児に無視された、話しかけても相手にしてくれないといったような感想を書く生徒もいた。生徒の正直な感想ではあるが、幼児の発達段階によることばや情緒の表現の違いなど、映像ではなく生身の幼児とのふれあいを通して得られる学びは将来につながるものであり、実習を通して経験を積むことの必要性を実感した。

すべての学習において、いかに自分事として学習することが大切であるかを感じた。

【英語科】

研究テーマ

「自らに問いかけ、答えを模索する中で学びを深化させる言語活動の充実」

○研究テーマの設定

近年求められている英語力とは、「関心のある事柄から日常的な話題や社会的な話題まで取り上げ、そういった事柄や話題について、一層幅広いコミュニケーションを図ることができる」ことであり、そのためには単に生徒同士が英語のやりとりをして終わるのではなく、ポスターや案内板から必要な情報を読み取ったり、論説文を読んで、筆者の意

図を読み取る「行間読み」が出来たりするような言語の運用能力が求められている。そこで、小学校から培った英語への関心・意欲を大切にしつつ、発達段階に応じて易から難に移行するような指導を追求することとした。

○具体的な取組

① 1 年生の活動

単元(Lesson 7 Athletes with Spirit)の導入で、車椅子バスケットボール選手・鳥海連志さんの「I couldn't do too many things. It was fun. (できないことが多すぎた。それが楽しかった)」という言葉のタネにして、生徒から「できないことが楽しいってどういうことだろう」などの疑問を引き出した。「あなたはできないことを楽しいと感じるか」と発問すると、最初は「できないことが楽しい」ということに矛盾を感じる生徒もいたが、次第に「できなくても一生懸命に練習した」「今は少しできるようになった」という体験を英語で表現しようとする生徒が出てきた。最後に自分の考えを英作文させると、鳥海さんの考えに賛成する意見がたくさん見られた。その後の授業でも「努力を楽しむこと」「仲間を大切にすること」について考え、英語で表現する活動を行った。

② 2 年生の活動

Let's Read 1 の“History of Clocks”の単元で、現代の様々な時計を見せた後に、「古代から現代にいたるまで、時計は進化し続けている」という不思議のタネを与えた。すると、生徒達にとって身近なものに対するタネだったので、「最初はどんな時計だったの?」、「今は、どんな風に進化しているの?」など、様々な問いが出てきた。本文を読めば答えを見つけることができるような問いを持つ生徒が多く、題材を読むための良い動機付けとなった。また、本文を読み進める中で、タネに対する疑問の答えを生徒それぞれが明らかにし、理解したことを自分の言葉で表現するリテリングの活動を行った。単元の初めに提示されたタネから、学びを深めるための言語活動に自然な流れで取り組むことができた。

③ 3 年生の活動

授業の最初の導入では、グループで自由に対話する時間を与え、リラックスした状態でインタラクションさせたり、毎月変わる英語の歌を歌わせて、英語特有の発音に慣れさせたりした。また、単元のはじめに「不思議のタネ」を入れることで、疑問を抱きながら英文を読み進めることができ、長文読解の動機づけにつなげることができた。Part 1 のプレゼンテーションやポスターの読解では、伝えたいことを正確に捉える読み方の指導を行い、Part 2 の対話文においては、それぞれの対話の要点を捉えさせた。ここで得た予備知識（スキーマ）を元に Read and Think で読解を行った。ここで言う読解とは、単なる「英文和訳」ではなく、段落の内容、ディスコースマーカの働き、あるいは助動詞や形容詞などの言葉の使い方に留意しながら、英文の構成を理解し、筆者が読者である生徒に伝えたいことを理解しながら読む「行間読み」のことである。また、このような活動で得た知識を活用して、不定期に自己表現する課題を与えた。

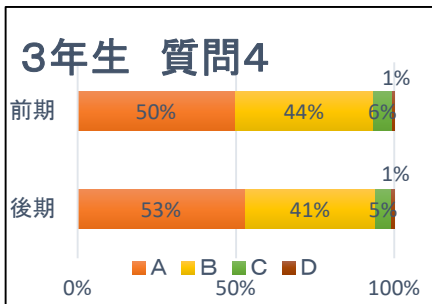
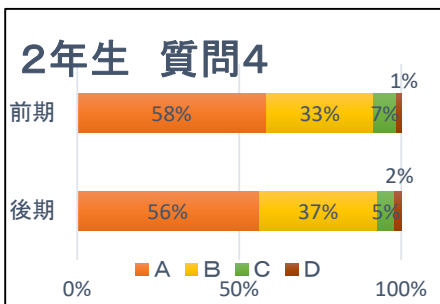
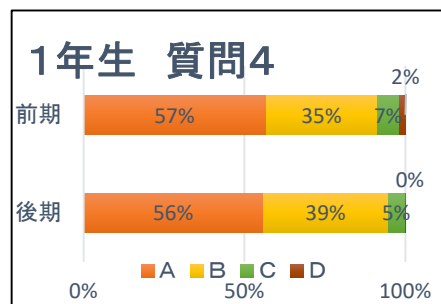
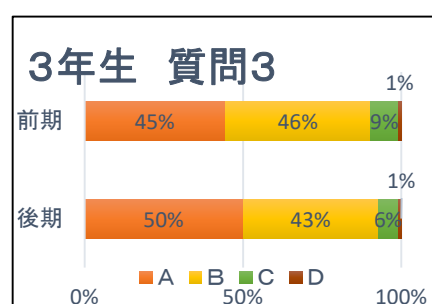
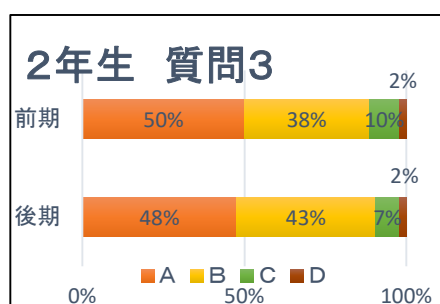
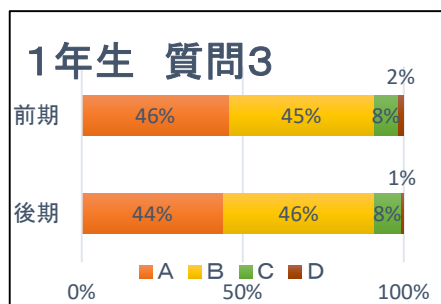
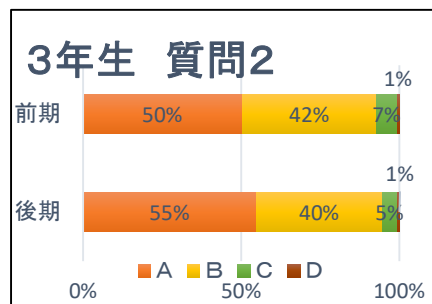
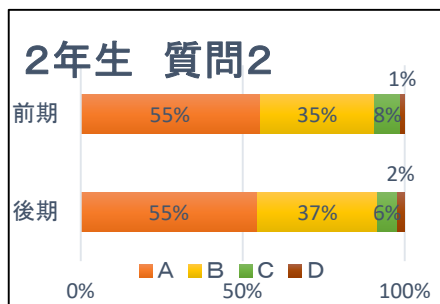
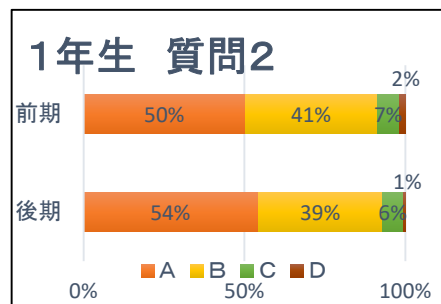
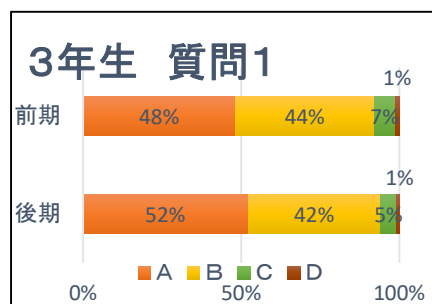
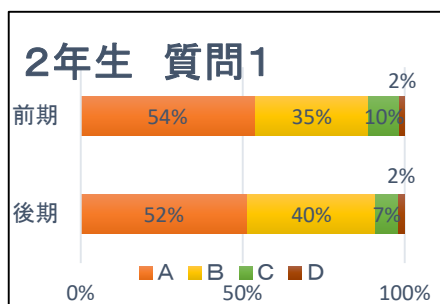
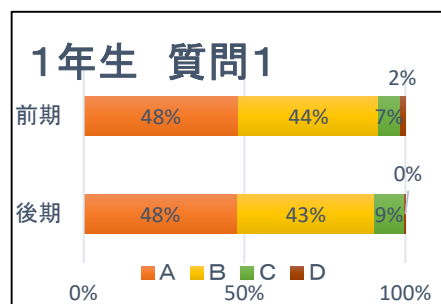
○今年度の成果と、今後に向けての課題

日頃から英文の読み方、情報の捉え方を学習した生徒の多くは、初見の英文やポスターなどを提示されても抵抗なく読むことが出来、グループワークの様子を見ていても、的確にまとめる様子が見て取れた。一方で、文法力や語彙力に課題のある生徒も一定数おり、来年度以降、個々の習熟度に配慮しながら、個別・最適な学習の時間を設け、それぞれが能力に応じた学びを通した達成感が得られるような授業の進め方についても研究していく必要がある。

IV アンケートの結果

1. 学習アンケート

問1. 自ら問いを創ることで意欲的・積極的に学習に取り組めましたか。
 問2. 自分の考えを伝えたり、他の人の考えを聞くことで新たな考え方に気づいたりすることができましたか。
 問3. 学習課題や自分の立てた問いの解決に向けて、学んだことを関連付けて考えることができましたか。
 問4. 自分の学びを振り返って、新しいことがわかった・できるようになったと感じますか。



学習アンケート分析 全学年で肯定的評価（A+B）が9割を超え、学びへの前向きな姿勢が定着した。特に3年生は全項目でA評価（自信がある）が向上し、質の高い学びが実現した。2年生は肯定的評価の総数は増加したが、A評価が「問い・関連付け」等で微減しており、自信の深まりに課題が見られる。1年生は「対話」のA評価が伸長した一方、「関連付け」は低下しており、知識をつなぐ指導が重要である。

IV アンケートの結果
1. 学習アンケート

リフレクションアンケートの結果

質問項目	1学期	2学期	変化
①【デジタル力】 自分やみんなことを考えてICTを使うことができましたか？	85%	83%	-2
②【デジタル力】 生活の中で上手にICTを使うことができましたか？	84%	81%	-3
③【デジタル力】 深く広く学習するためにICTを使うことができましたか？	85%	85%	±0
④【読解力】 自分から情報を集めて「なぜ」を読み取ることが できましたか？	79%	83%	+4
⑤【読解力】 いろいろな情報を正しく読み取ることができましたか？	81%	84%	+3
⑥【読解力】 相手の思いを読み取ることができましたか？	77%	79%	+2
⑦【コミュニケーション力】 感じたことを素直に表現することができましたか？	76%	79%	+3
⑧【コミュニケーション力】 互いを認め合い対話することができましたか？	80%	83%	+3
⑨【コミュニケーション力】 分かりやすくプレゼンすることができましたか？	63%	70%	+7
⑩【創造力】 新しい価値や最適解を見出すことができましたか？	69%	75%	+6

リフレクションアンケートの分析 「自ら問いを創る」「関連付けて考える」といった思考の深化を問う項目でも、全学年で高い肯定率を記録した。特に3年生は「新しいことがわかった・できるようになった」という実感（A評価）が向上しており、自己調整学習が成立している。課題は2年生のA評価率の伸び悩みである。肯定評価（A+B）は高いものの、自信を持って「できた」と言い切る層が微減している。1年生の柔軟な対話姿勢を維持しつつ、中核となる2年生の思考の「質」を高めるリフレクション（振り返り）の充実が必要である。

IV 学びの深化のための ICT 活用について

1. 本校における ICT 活用の概要

GIGA スクール構想による端末環境を活用し、本校では生徒の資質・能力を最大限に引き出すための授業改善に取り組んでいる。ICT 活用の視点は、大きく以下の3点に集約される。

- ・ **個に応じた学習の支援（個別最適な学び）**： 学習の進捗や理解度に合わせて、生徒自身が学び方を選択したり、客観的なデータに基づいて自己を振り返ったりする活動を支援する。
- ・ **思考の可視化と探究（深い学び）**： シミュレーション機能や可視化ツールを活用し、抽象的な概念の理解を助けたり、試行錯誤を通じて考察を深めたりする場面を創出する。
- ・ **時間や場所を越えた連携（協働的な学び）**： クラウドの特性を活かし、教室内のリアルタイムな意見共有だけでなく、物理的な距離や時間の制約を超えたプロジェクト活動を実現する。

2. 具体的な実践事例

(1) 個に応じた指導と自己調整

生徒一人ひとりのペースや特性に合わせた学習環境を提供し、主体的な学びを促した。

- ・ **習熟度別コースの選択** 学習支援ソフト（オクリンクプラス）を活用し、課題を「ガイドあり」「標準」「発展」などのコース別に提示した（図1）。生徒は自分の理解度について考え、最適なコースを自ら選択して学習を進めた。デジタルツールを活用することで、課題準備の効率化や、リンク添付によるヒントの提供、進捗のリアルタイム確認が可能となり、個への支援が充実した。
- ・ **学習定着度の確認と動機付け** クイズ形式のプラットフォーム（Kahoot!）を用いた基礎知識の定着確認や、Google フォームを用いた小テスト・振り返りを実施した。ゲーム的要素による意欲の向上に加え、短時間で自身の理解度を把握できる仕組みを整えた。また、フォームの集計機能を活用することで、教師は正答状況を瞬時に把握し、即時フィードバックを行うことができた。
- ・ **動画による客観的な動作分析** 器械運動や球技において、自身の動きをタブレットで撮影し、即座にレビューする活動を取り入れた。自身の感覚と実際の動きのズレを客観的に認識させることで、自律的なフォーム修正に役立てた。

(2) シミュレーションと可視化による探究

デジタルツールならではの機能（計算・描画・変形）を活用し、思考や考察に時間を割く授業を展開した。

- ・ **数理的なシミュレーション** 数学科の関数や図形分野において、デジタル教材を用いてグラフの動的な変化や立体の切断面を確認した。また、統計分野では標本調査の無作為抽出をシミュレーションし、データの散らばり（箱ひげ図 図2）の変化を瞬時に可視化することで、数学的な考察を深めた。
- ・ **生活設計のシミュレーション** 社会科において、表計算ソフトを用い、特定の条件下（1956年の生活）での生活費シミュレーションを行った。予算配分を試行錯誤し、数値の変動をリアルタイムで確認しながら、社会的事象への理解を深めた。
- ・ **情報の構造化と抽象化** デジタル科におけるピクトグラム制作では、地域のシンボルをデジタル上で図形化・修正するプロセスを通じ、対象を抽象化する思考力を養った。また、教科のまとめ学習においても、スライドを活用して知識を構造化・整理した。

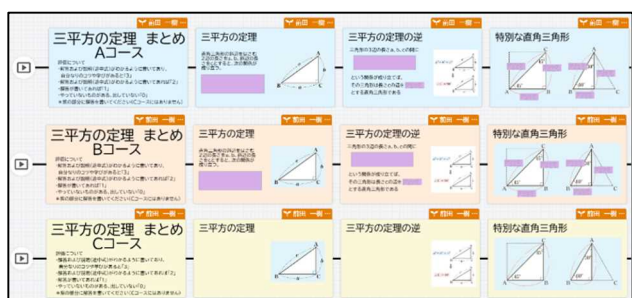


図1 難易度別課題

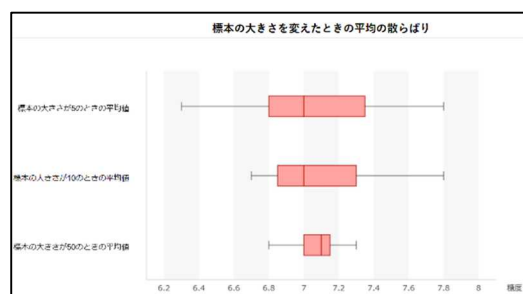


図2 トマトの糖度の箱ひげ図

(3) クラウドを活用した協働とプロジェクト

クラウドの「共同編集機能」や「共有機能」を活かし、対話や協働の質を高めた。

- **プロジェクト活動（特別活動）** 運動会の団旗制作（図3）や、水族館への寄贈用謎解き制作（図4）において、デザインツール Canva を活用した。団旗作成では夏休み期間中にリモートで作成を行い、水族館謎解きでは約20名のメンバーや小グループがクラウド上で共同作業を行い、成果物を完成させた。
- **思考のリアルタイム共有** 学習支援ソフト（オクリンクプラス）を活用し、教科書の内容に対する意見や、生徒から生まれた「問い」をリアルタイムで一覧表示・共有した。他者の多様な考えに触れることで、自らの思考を広げ深める活動を行った。

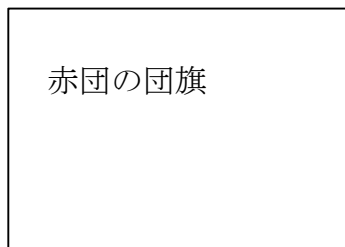


図3 運動会団旗赤団

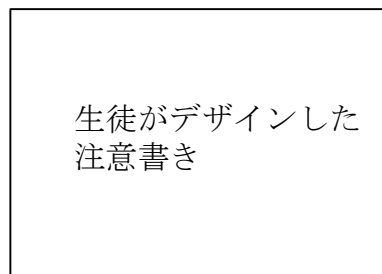


図4 のとじま水族館謎解き

3. デジタル科におけるデータ活用と探究・協働の学び

デジタル科初年度となる本校では、生徒のデジタル活用能力を高めるため、「データ活用探究学習」「デジタル・シチズンシップ（DC）教育」「先端技術体験」に取り組んだ。生徒・教員共に試行錯誤の連続ではあったが、以下の3つの視点から学習活動を展開し、着実な成長が見られた。

(1) 個に応じた技能習得と試行錯誤（個別最適な学び） 初めて扱うツールであっても、生徒自身が試行錯誤しながら操作を習得し、自分の考えを形成するプロセスを重視した。

- **データ処理の基礎と試行錯誤** 1学期の学習では、スプレッドシート（図5）を用いて都道府県別人口データの平均値算出やグラフ作成を行った。多くの生徒にとって初めての経験であり、教員側も手探りの状態であったが、生徒は自ら操作方法を試し、データを整理・処理する技能を身につけた。この活動を通じ、与えられたデータを鵜呑みにせず、自らの手で処理し結論を導き出す素地を養った。

(2) データの可視化による根拠ある提案（深い学び・探究） データをグラフや数値として「可視化」することで、現状を客観的に分析し、説得力のある仮説・提案につなげる探究学習を行った。

- **データに基づく仮説検証** 「石川県の人口密度」に関する考察では、中央値や散らばり具合（度数分布）をグラフ化して視覚的に捉えることで、「高くも低くもない」「散らばりが大きい」といった独自の結論を導き出した。
- **アンケート活用による課題発見** 2学期の探究学習では、「より良い学校作り」をテーマに生徒一人ひとりが企画を立案した。Google フォームを活用してクラスメイトへのアンケートを実施し、回答結果を即座にグラフ化して分析した。例えば、「学年全体で協力できているか」という問いに対し、数値データ（50%が「少し協力できている」と回答など）を根拠として提示することで、課題の所在を明確にし、説得力のあるプレゼンテーション（図6）を作成した。

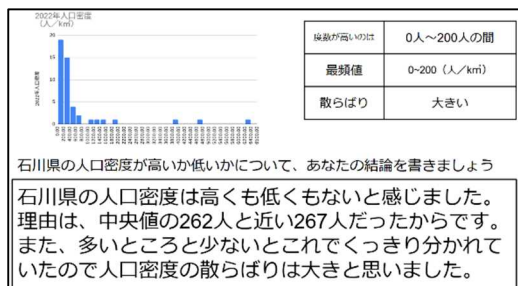


図5 都道府県別人口データの分析

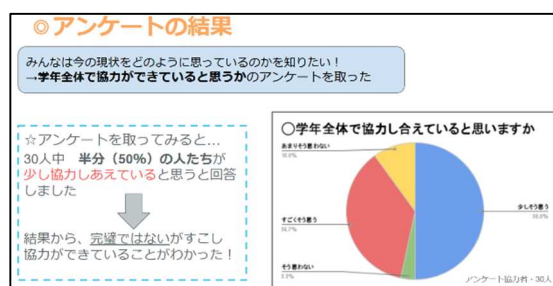


図6 アンケート結果の分析

(3) クラウドを活用した協働とプロジェクト実行（協働的な学び） クラウドツールの共有機能を活用し、意見の集約や共同編集を行う中で、他者と協働する際のメリットと課題（デジタル・シチズンシップ）を実践的に学んだ。

- **クラウド上の共同編集と DC 教育** 「協働学習『勝手に進めてしまうと』」の単位では、1つのファイルを複数人で同時編集する際のマナーやリスクについて議論した。生徒からは、共同編集には「良い意見が出る」「効率が良い」というメリットがある一方、「勝手に変更される」「意見が割れる」といった課題も挙げられた（図7）。この振り返りを通じ、デジタル空間での責任ある振る舞いについて理解を深めた。
- **学年横断プロジェクト「シャッフルチームビルディング」** 探究学習の成果として選ばれた「シャッフルチームビルディング」を実施した（写真1）。くじ引きで構成された即席グループにおいて、クラウド上で脚本を共同制作し、演劇を行うプロジェクトである。対面でのコミュニケーションとデジタルの共同作業を組み合わせることで、初対面の生徒同士でも円滑に会話が生まれ、学年全体の絆を深めることにつながった。

～長所～	～短所～
・良い意見が出る みんなで考えられる ・効率がいい 大人数で分担してできるから ・どんな感じか方針が決まる みんなで決めれる ・楽しく学べる みんなで協力をして問題に取り組んで解けた達成感がある	・自分が思うようにできない 自分だけじゃない ・意見が割れる みんな違う意見 ・人任せな人が出てくる 自分の作業が終わるとすることがない

生徒と
教員の写真

図7 共同編集の長所・短所

写真1 脚本を作る様子

4. おわりに

ICTは「個の学び」を最適化すると同時に、「集団の学び」を拡張する強力なツールである。今後も、教科のねらいや活動の目的に応じて、最も効果的な手段を選択・活用する授業デザインを推進していきたい。デジタル科における今年度の取り組みは、表計算ソフトの活用やスライド作成などにおいて多くの課題を残しつつも、失敗を恐れずに挑戦する姿勢を育むものとなった。次年度以降も、データに基づき考え、デジタル技術を用いて他者と協働する力を継続的に育成していきたい。

お わ り に

2年目を迎え、新たに赴任した教師も「不思議のタネ」に取り組んでおりました。

最初は「何の研究だろう」と戸惑う姿が見られましたが、校内研修を経て「不思議のタネ」の実践へと踏み込んでおりました。苦戦しながらも、試行錯誤を繰り返し、徐々に面白さを感じていく様子が見られました。昨年度から取り組んでいた教師は、よりよい思考に繋がるタネはどんなタネなのか。教科部会や職員室で検討を繰り返し、複数の学級で異なるタネを試すなどして、最善のタネを模索する様子が見られました。

研究以外の業務もたくさんある中で、どの教師も果敢にタネ蒔きに挑んでおりました。

私たち教師が目指すべきところは、授業を起点として生徒の学習意欲を高め、自ら疑問や課題を抱きながら解決への道筋を考え、最適解を導き出せるようにすることであると思います。そのためには授業を通して「面白い」「伸びてきているような気がする」「できるようになったかもしれない」などの心の動きを創り出す必要があり、生徒はそう思った時に、授業でも家庭でも自主的に学習をはじめます。伸びを実感するからこそ、もっとできるようになりたいと努力を続けます。何かを達成したからこそ、次はどんなことをするんだろうと期待します。その積み重ねが、自分で課題を見つけ解決する力へと進歩していきます。この営みはどんなに社会が発達しようと専門職である教師にしかできないことではないのでしょうか。

“There are no other teachers who can inspire your students in a subject you teach, but you.”

(目の前にいる生徒の心に火をつけることができる教師はあなた以外いない)

いつかどこかで聞いたこの言葉を信じて、来年度は更に進んだ姿をお見せできるようにしていければと思います。

今年度も立正大学教授 鹿嶋真弓氏からとても多くの内容をご教授していただきました。私たち人間にとって有効な学びとは何か、どうすれば有効な学びへとつながるのか等、考えさせられるご指導ばかりでした。さらにより深い研究へと進められるように、今後ともご指導ご助言を賜りたいと存じます。

教頭 土田 友信